

小さき兄弟会総長からの手紙



2007年復活祭

復活祭が、いのちの祭典がやってきました。「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ」(ルカ 24 : 5 - 6)。復活祭がやってきました。希望が訪れたのです。「なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起すのか」(ルカ 24 : 38)。「恐れることはない」(マタイ 28 : 10)。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(マタイ 28 : 20)。復活祭がやってきました。私たちは出発しなければなりません。「行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言い

なさい。そこでわたしに会うことになる」(マタイ 28 : 10、マルコ 16 : 7 参照)。

親愛なる兄弟姉妹の皆様、復活されたキリストがその光で私たちの道を照らし、その現存によって私たちの希望を確かなものにしてくださいますように、そして、主の復活が私たちを豊かないのちで満たしてくださいますように！

思い出

ほんの数ヶ月前に、本会は臨時総集会を開きましたが、それは、参加したすべての兄弟にとっても、また兄弟会全体にとっても真に復活のいのちに満ちた出来事でした。エンマウスの弟子たちのイメージ(ルカ 24 : 13 - 35 参照)は、臨時総集会の間ずっと私たちを支えてくれました(総括文書「主は道々わたしたちに話してくださる」3)。私たちはエンマウスの弟子たちの体験に導かれて、主が道々どのように私たちに話して下さり、その体験がどのように私たちに召命をよりよく理解させる(総括文書 10 参照)助けとなっているかを実感したのです。クレオパとその道連れのように、私たちも御言葉と御聖体のパンを分かち合った時に心が燃えているのを感じ、少しずつでしたが、主がその御顔を私たちに示して下さっている(総括文書 8 参照)と感ずることができました。エンマウスの弟子たちのように、私たちもまた、「信仰の分かち合いの中で」心の不安を自由に表わしました。私たちの心は他の人々の中に実現している救いの神秘に開かされました(総括文書 3 参照)。そして彼らのように、私たちもまた、「意味を乞い求める者」として(総括文書 6 参照)懸案と長年の疲れと不安を分かち合った時に(総括文書 7 参照)、「貧しく十字架にかけられたキリストと、この世界で貧しく十字架にかけられた人々の代弁者であるキリスト」(総括文書 9)に基づく希望の訪れを受けたのです。そして、「私たちは御復活の主からいただく内的な力に驚かされると共に、それによって刷新された希望をもってそれぞれの修道院に戻っていきましました」(総括文書 3)。そして、その力は、少しずつ私たちを迷いと安易な理想主義と皮相的な实用主義から解放してくれたのです(総括文書 9 参照)。

しかしながら、この総集会は、「開かれた総集会」であることを望みましたので、そのような総集会として、各管区や分管区、各兄弟姉妹の間で続行される必要があります。このようにして、「会のカリスマの創立の雰囲気を保っている場所への巡礼」(総括文書 2)の間に共に味わった復活の体験は、それぞれの修道院においても、また、私たち一人一人の心の中においても体験され続けることでしょう。私たちが総集会の招きを受け入れるならば、そして、

総集会から出された指針を実行に移すならば、このことは可能となるでしょう。私たちが「良い状態」から「より良い状態」へ移行するために、これらの呼びかけや招きのいくつかをこれから述べたいと思います。

エンマウスという村に行く途中 彼らは話し合っていた

本会は、創立の恵みというプロジェクトを通して、歩み続けることを願っていました。この歩みは、現在の会憲の発布、及び、私たちの生活とミッションを再生し（re-creating）再建する（re-founding）ことを宣言することから始まり、その目的は、活力と創造力をもって、神と世界に忠実に仕え、常に「聖なる教会の足下」（会則 12：4、総括文書 8 参照）に留まりつつ、現代のフランスカンとしての私たちのアイデンティティーを生き抜くことです。

このようにして、私たちは「私たちの生活と人々の暗闇の中に光る」時のしるしに福音的に応えたいと願っています。私たちは時のしるしを通して、神から問われていると感じるのです（2003 年総括文書 6 参照）。それと同時に、私たちは、フランススコとクララの「積極性と創造性と聖性を勇気をもって新たにしたい」（奉献生活 37 参照）と願っています。

そのために、臨時総集会総括文書「主は道々私たちに話してくださる」は、「継続的な識別」の態度で生きる必要性を説いています。つまり、信じる気持ちと創造性を持ち、絶えず私たちの生活とミッションを評価する態度です（総括文書 35、33 参照）。それによって、「時代の変化によってもたらされるチャレンジの中で」（総括文書 1）私たちのカリスマを適応させて行くことができるでしょうし、現代人の多くが「歴史と人間存在と命の意味について」抱いている問 - それは、また私たち自身の問でもあります - に対して福音的で、フランスカン的な答えを出すことができるでしょう（総括文書 6 参照）。静止した忠実さというものに直面して、私たちは、歩みを止めずに生きること、つまり、いつもプロジェクトを持って生きることを求められています。自分の殻に閉じこもったり、自分の内面に逃避したりする誘惑に出会うとき、私たちに求められていることは、識別を軸として生きることです。それは、未来を計画するためばかりでなく、特に、今、ここで、主の御心を知って（ローマ 12：2 参照）、将来に目を向けるためなのです（奉献生活 110 参照）。

私たちの生活とミッションの再生と再建のためにまず必要なことは、主の御心を知るための識別です。ですから、個人としても、また共同体としても絶えずフランススコと共に次のように祈ることが必要です：「この上なく高く、

栄光に満ちておられる神、私の心の闇を照らして、正しい信仰、確かな希望、そして、完全な愛を、更に、理解と認識をお与えください。このようにして、主よ、あなたの聖にして真実な掟を私が実行できますように」(十字架上の主の御前で捧げられた祈り)と。また、できるだけ客観的な方法で現実を識別することも必要です。たとえば、兄弟たちの高齢化という会内部の現実、私たちの存在と責任、兄弟たちと各管区(及びその他の構成単位)の持つ可能性と弱点、私たちが生きる社会の文化的、政治的な背景もたらす外的な現実。この内的・外的な現実を踏まえ、そうするのがひどく辛い時でも明晰さと大胆さをもって、適切な決断を下さなくてはなりません。その際、根拠のない理想主義に陥ったり、息が詰まるような現実主義に陥ったりしないように必死に努力しなければなりません。いくつかの管区や構成単位が経験している現実と直面しても、古い組織を維持しようとして自分の殻に閉じこもってはいけません。大切なことは、逆境にあっても未来に目を向け創造的であることです。

そのためには、神と教会との深い交わりのうちに、常に御言葉によって照らされた信仰の視点から現実に対して批判的に取り組むことが必要です。なぜなら、総集会の文書がいみじくも述べているように、「生活を解釈するために現実に近づくだけでは十分ではなく」、「信仰の目で現実を見ること、つまり、具体的な教会との交わりの中で神とその御言葉との深い関係を土台にして生活することが必要」(総括文書14)であるからです。信仰の目で見てこそ、過去を感謝の気持ちで見つめることができ、現在を情熱をもって生きることができ、未来を希望をもって受け入れることができるのです(使徒的書簡「新千年期の初めに」1参照)。

フランシスカンであろうとするならば、どのような識別に際しても、福音書を手に取り、キリストから助言をいただくかねばなりません(2チエラ15参照)。会の創立800年祭を準備するこの2年目に入って、私たちは、大胆に福音を生きるように招かれています。「大胆に福音を生きよう!」は今年の私たちのテーマです。福音を生きるとは、福音に照らされることであり、福音を、個人としてもまた共同体としても私たちの主な識別基準とすることなのです。

親愛なる兄弟姉妹の皆様、私たちは2006年の間に創立の恵みプロジェクトの中で、識別の態度で生きること、そして、「主よ私に何を御望みですか」と問うて生きることを求められました。この態度とこの問いを、私たちは生涯持ち続けなければなりません。識別の態度で生きましょう。主が私たちより先に行っておられることを信じて出発しましょう(マルコ16:7参照)。週の初めに走った弟子たちのように、また、その同じ日の夜に走ったエンマ

ウスの弟子たちのように私たちも走りましょう(ヨハネ 20 : 4 参照) そして、時を移さず出発しましょう(ルカ 24 : 33 参照)。このような態度でいてこそ、私たちは主が何を御望みかを識別することができ、「本当に主は復活された！」(ルカ 24 : 34) と確信をもって言うことができるのです。

彼らは時を移さず出発してエルサレムに戻ってみると
11人が集まっていた。

エンマウスの二人の弟子の目が開け、イエスだと分かった時に、二人は後に残してきた仲間に出発するために時を移さず出発してエルサレムに戻りました(ルカ 24 : 33 参照)。フランシスコのカリスマに従う私たちにとって、兄弟会全体が神との出会いのすぐれた場となるように招かれている(会憲 4 参照) 兄弟共同体は復活祭の喜びを生き、自分の信仰体験を他者と分かち合うすぐれた場でもあるのです。臨時総集会の総括文書は、兄弟共同体というものが感謝を持って受け取るべき賜物であると同時に、粘り強い忍耐力をもって築くべきものであると言っています。この務めは、「基本的な課題」として提示されています(総括文書 27)。私たちは、絶えず成長することを求められている兄弟共同体を形作るのです。私たちに求められているのは、兄弟共同体の建設者となることであって、消費者となることはありません。殊に、個人としても、共同体としても、私たちを取り巻く現実が「いつも限界と罪の跡をつけられている」時はなおさらです。こういう状況なので、臨時総集会が兄弟的生活への配慮を呼び掛けたのは至極当然のことです:「兄弟共同体には注意深い配慮が必要です」(総括文書 31)。そして、「同伴と母親的配慮が必要なのです」(総括文書 32)。

兄弟的生活に配慮するとはどういう意味でしょうか? 臨時総集会の文書は、この務めを遂行するための重要な助言を与えてくれています。兄弟的生活に配慮するとは、時々私たちの間に欠けている人間関係に配慮し、兄弟共同体の神学的ルーツを明らかにすることです。なぜなら、「私たちがお互いを兄弟として受け入れているのは、すべての人の父である神を信じているからです。」この信仰の基盤の上に立ってこそ、私たちは他者を受け入れることができ、フランシスコのように「主は私に兄弟を与えてくださった」と言うことができます(総括文書 26)。兄弟的生活に配慮するとは、あらゆる種類の分裂に対して闘うことでもあります。「この分裂は私たちの兄弟的生活にも無縁ではありません」(総括文書 31)。今日のように断片化され分裂の傷に病んでいる世界では、預言的なしるしとなるためには、私たちの間にあるあらゆる種類の分裂を乗り越え、すべての人の交わりの真の架け橋となることが必

要です（総括文書 31 参照）。相違があることは脅威であるどころか、「神についての良い知らせ、つまり無限の豊かさ」なのです（総括文書 4）。兄弟的生活に配慮するとは、私たちの規則が適切な形で用意してくれている道具を活用するという事です。たとえば、生涯養成、修道院会議、兄弟愛をもって矯正すること、などです。兄弟的生活に配慮するとは、時には簡単なことであり、時には難しいことですが、相互のゆるしと交わりの道を絶えず求めることなのです（総括文書 31、53 参照）。

兄弟共同体を築くにあたって最大の難問は、私たちの間に深いコミュニケーションが欠けているということ、そして、清貧に基づいて遠慮なく互いに相手を十分信頼して正直に話しかけることが難しいという点にあることを認識しつつ、臨時総集会の文書は、コミュニケーションというものを兄弟的生活に配慮するための特にすぐれた手段と考えています。それは、私たちに次のことを可能にさせるような深みのあるコミュニケーションでなくてはなりません。すなわち、「私たちの生活の方向について」自問し（総括文書 3）

「私たちの生活と仕事にしばしば傷跡を残す個人主義と孤立を克服」し（総括文書 49 : 1）、「兄弟であることの喜びと苦勞を共に分かち合い、個人的な召命について内省し、・・・共にキリストに従い、神への信仰を深め」（総括文書 51）、「あらゆる次元で生活を分かち合い」（総括文書 32）信仰を土台として私たちが持っているものについてはっきり話すこと（総括文書 43 参照）を可能にするコミュニケーションでなくてはならないのです。臨時総集会が「私たちを未来へ向けて導く道であり、方法である」（総括文書 39）として、また、「小さき兄弟としての成長の鍵となる礎」（総括文書 49 : 1）として、さらに兄弟的な分かち合いの学び舎（総括文書 51 参照）として提示した「エンマウスの方法論」は、修道院、管区、分管区で実践されるならば役に立つはずで

「再建」というのは、私たちの生活とミッションの質を高めることです。しかし、そのためには、関係性の質が高くなければなりません。つまり、自分自身との、他者との、そして神とのコミュニケーションの質が問われているのです。兄弟的生活、私たちの兄弟共同体のイメージ、そして、世界に対する証しは、コミュニケーションによって左右されます（総括文書 34 参照）。だからこそ、総集会の文書は、私たちに絶えずコミュニケーションの方法を吟味するように促しているのです。コミュニケートする（意志の疎通を図る）ということは、「自分とは異なる他者との出会いへと向かう」（総括文書 22）ことです。コミュニケートするということは、他者のニーズを認めることであり、自分が常に負いめをもつ者であることを認めることであり、神の賜物が常に私たちの先にあることを認めることです（総括文書 20 参照）。「私た

ちに与えられているあらゆるよいものは、私たちの所有ではなく、皆と分かち合い、皆に返されるものである」(総括文書 19) という心の貧しさを己の根本的な真理として認める人だけが、コミュニケーションの仕方を知っているのです。また、コミュニケーションを人間関係と考えるならば、コミュニケーションする(交際する)ということは、まず、自分を他者に与えることであり、同時に他者を自分の生活に関わらせ、快く受け入れることであることが分かります。従って、コミュニケーションとは一方方向の行為ではなく、循環する相互的で相関的な行為なのです。臨時総集会に参加した兄弟たちは、私たちの兄弟共同体を出会いと対話と兄弟的なコミュニケーションの場に変える緊急性を感じました。そのようにしてこそ、私たちは相互信頼が織りなす生地を補強することができ(総括文書 16 参照) お互いに信頼し合い、受け入れ合い、激励し合い、必要に応じて矯正し合い、いつも愛し合うことができます(総括文書 15 参照)。

二人は道で起こった出来事を 使徒たちに話した

私たちは歩きながら、また、共同体における兄弟的な生活を大切にしながら、「この世界をキリストの福音であまねく満たすために」(1 チェラ 97) 出かけるように求められています。「新しいパラダイムやカテゴリーに満ちた変化の激しい時代に生きている」私たちに、主は、道々話しかけてくださいます。復活されたキリストは、「私たちのミッションについての真剣な見直しと、効果的な在り方と証しについての未知の道を」(総括文書 33) 明晰さと大胆さをもって選び取るようにと切に私たちに呼びかけておられます。そうすれば、私たちは、「世界と教会に奉仕する派遣されて宣教する使命を帯びた兄弟共同体として」(総括文書 58) 小さい人々の間で小さき者として福音を生きることができるでしょう(総括文書 33 参照)。臨時総集会の文書は私たちに、「現在の職務的な配置について継続的な批評と評価に着手する」(総括文書 58) ように求めています。それは、「自分のミッションのどこに焦点を合わすべきかを再検討し」、「修道生活の境界状態(liminality)をより確かに受け入れ、辺境に生きる者となるためであり - それはフランシスカン・アイデンティティーの本質です - (総括文書 33 参照) 「紛争状態や緊張関係と新しい交易市場の只中における存在」(総括文書 36 参照) となるためです。

私たちはフランシスコのように、他者に出会うために、向こう岸に渡るために出かけて行き、地理的にも、社会的にも、文化的にも、政治的にも、宗教的にもいつも境界線を踏み越える者 border-crosser(総括文書 36 参照)と

なるように招かれています。賜物の論理と、在り方と謙遜の靈性にに基づき、誰をも排除せず、すべての人を受け入れて、「時代のイデオロギーによって設定された境界線内 border に閉じこめることなく」(総括文書 37) そして、ファンダメンタリズムと現今の「感情的な」風潮に足をさらわれたいために、私たちフランシスカンの偉大な哲学的、神学的、神秘的、芸術的伝統に支えられながら、私たちは言葉と行いをもって福音を宣べ伝えるように招かれています(総括文書 13 参照)。そして、「信仰と交わりの惜しみない捧げもの、希望の目印となる」(総括文書 37) ように招かれています。

親愛なる兄弟姉妹の皆様、昨年開かれた臨時総集会の総括文書が示している課題はたくさんありますが、紙面の都合上、ここにその一部だけをご紹介します。私たちは、それらのすべての課題に応えるだけの明晰さと大胆さを持つことができるでしょうか？臨時総集会の最中に感じることができた希望と課題に真剣に応えようとする多くの兄弟姉妹のおかげで、私は今樂觀的な気持ちであります。

師父聖フランシスコの祝福が私たち皆の上にありますように。復活祭おめでとうございます。



3月19日、聖ヨゼフの祝日に、ローマにて

小さき兄弟会総長 兄弟ホセ・ロドリゲス・カルバッリヨ ofm

Prot.N.097679